

2020.3.29 「愛の視力の回復」 マタイによる福音書 7 : 1 ~ 6

新型コロナウイルスの影響によって、礼拝堂に集まることのできない、主の日となりました。教会の歴史上、極めて稀にみる状況ですが、わたくしたちは主においてひとつ、祈りにおいて一つです。

同じ場所に集えない時でも、このような時だからこそ、イエスさまの御言葉に静かに耳を傾け、神さまに立ち返り、神さまからの平安を得ることができますように、共に祈って参りましょう。

読み続けていますマタイによる福音書。今朝は、「人を裁くな」という御言葉を与えられました。「人を裁くな」

この1週間をふりかえってみましょう。私たちの歩みは、1週間だけでも、人を裁くことの多いものだったのではないのでしょうか。

「裁く」と訳されている言葉は、「見分ける、判断する」という意味です。「裁く」と言うと、「あの人はだめだ」と言うことだけを指しているように思いますが、必ずしもそうではなく、人のことをあれこれと評価し、判断する、そのことの全体を含んでいます。

私たちは日々、良きにつけ悪しきにつけ、人を裁いて生きています。そして私たちが、どちらかと言うと好むのは、人を批判すること、悪い点、足りない点をあげていくことではないのでしょうか。それによって、頑張っている自分を慰めているのかもしれない。

それにしても、わたくしたちは社会の中で生活をしているから、何らかの意味で人を判断したり、評価したりすることなしには、生活することはできないでしょう。

家族の中でも、よいことを褒め、悪いことを叱ることがあります。個人的なことだけでなく、社会の制度として裁判があります。人を

評価するということ言えば、入学試験や入社試験、資格試験などもあります。果たしてイエスさまは、それらのことを全てやめてしまいなさいとおっしゃっているのでしょうか。

そうではないのです。

イエスさまは、このようにおっしゃいました。

7 : 3 ~ 5 あなたは、兄弟の目にあるおが屑は見えるのに、なぜ自分の目の中の丸太に気づかないのか。兄弟に向かって、『あなたの目からおが屑を取らせてください』と、どうして言えようか。自分の目に丸太があるではないか。

ここでは、人を裁くことが、「兄弟の目にあるおが屑を見ること」にたとえられています。「おが屑」は、口語訳聖書では「ちり」となっていました。人の目の中に小さなゴミがある、それを見つけて、指摘し、取ってあげようとする、それが人を裁くことだということです。

さらにイエスさまは、「自分の目には丸太があるではないか」とおっしゃっています。「丸太」は、口語訳では「^{はり}梁」です。家の屋根を支える「梁」。太く、立派な材木が使われます。そういうものが自分の目の中にはあることに気づかないのか、と主はおっしゃるのです。

わたくしたちは、自分自身が見えません。自分のなおい気づかず、人のなおいは気になる、とも言われます。

人の目の中のおが屑、小さなちりを見ている、その自分の目の中には、はるかに大きな丸太、梁がある。そのような者が、人の目のゴミを指摘したり、それを取ってあげたりすることなど、できないのだと、おっしゃるのです。

「人を裁くな」の、「裁く」という漢字は、「断(た)つ」とも読めま

す。「裁つ」とは、衣服に仕立てるために、型に合わせて布地を切ることです。「人を裁く」というのは、人と自分の間を切ることになります。それだけでなく、イエスさまと自分の間をも、切ってしまうのです。

イエスさまにつながっている人は、隣人と距離をおいて、その隣人の目におが屑がないか、観察するのではなく、その隣人と結びつこうとしてゆくのです。わたしたちが誰かの「観察者」になり、隣人

を微に入り細に入り観察し、批判していくところには、責任もなければ、愛もありません。他への批判は、ピッタリと当たっていればいるほど、いよいよ人と人の間は離れてしまいます。

愛は観察しませんし、距離をおかないのです。相手の身になって考えます。

それなら、正しい判断や忠告も、いけないのでしょうか。そうではありません。イエスさまはおっしゃいました。**7：5 まず自分の目から丸太を取り除け。そうすれば、はっきり見えるようになって、兄弟の目からおが屑を取り除くことができる。**

「兄弟の目からおが屑を取り除」いてはいけない、のではなく、「まず自分の目から」、第一にすべきことがあるというのです。

読み続けています山上の説教には、この「まず」が、三回出てきます。5：24「腹を立ててはいけない」という小見出しのところでは、「**まず行って兄弟と仲直りをし**」「**供え物を献げなさい**」「**さもないと**」「**あなたは牢に投げ込まれるにちがいない**」

6：33「**何よりもまず**、神の国と神の義を求めなさい」です。この「まず」が大切です。

この「まず」にこそ、信仰が宿るのです。この「まず」こそ、礼拝なのです。

「まず自分の目から丸太を取り除け」

自分の目の丸太は、どうしたら取り除くことができるのでしょうか。

「自分にも同じような欠点があるから、あんまり人のことは言えない」ということでしょうか？

イエスさまがおっしゃっておられるのは、そういうことではありません。

考えてみてください。おが屑と丸太とでは、全くスケールが違います。私たちは、人と自分とを比べて、「どっちのおが屑が多いか、少ないか」などと批評しますが、

イエスさまが「あなたの目には丸太がある」とおっしゃるのは、人と人とを比べてのことではないのです。

主は7：2でおっしゃいました。

あなたがたは、自分の裁く裁きで裁かれ、自分の量る秤で量り与えられる。

神様があなたをお裁きになる、とおっしゃるのです。

その時、あなたの目には丸太があることを明らかにされる、というのです。

私たちは、神様との関係において、神様の裁きの前では、「目の中に大きな丸太がある者」なのです。丸太があるから、目を塞がれてしまっている者なのです。

わたしたちは、自分自身が見えません。自分のものさしだけでは、

何も見えていないのです。

神さまの目で見られた時だけ、自分の目に大きな丸太があるのが分かるのです。

私たちの目にある丸太とは、何でしょうか。それは、わたしたちの罪です。神様を忘れ、自己中心に、自分の思いによって生きている、その罪が、私たちの目を塞いでいるのです。

人を裁くことも、そこから生じてきます。裁くことは本来、主人である神様のみがなさることなのです。私たちが人を裁こうとするのは、その神様に代わって、自分が主人になっているのです。

私たちに人を裁く資格がないのは、「自分もあの人と似たようなものだから」ではありません。そもそも、人を裁くことができるのは神様お一人だから、なのです。

そのことを見失って、自分が裁き手になろうとすることを、聖書は「罪」と言います。

この罪の丸太は、神様が私たちをお裁きになる時に、明らかになる。そうであるならば、その丸太をなんとかせねばなりません。どうすればよいのでしょうか。

実は私たちは、自分で自分の目の丸太を取り除くことはできないのです。この丸太に気づくことすら、なかなかできないのです。人を裁いている自分の目の中に丸太がある。それは、神様の裁きを見つめることなく、人と人との関係の中でのみ、考え、見ているからです。

では、そうすればよいのでしょうか。

今日の説教題を「愛の視力の回復」としました。それは、イエスさまによって、まことの視力を回復させられるということです。

わたしたちの目を、イエスさまによって、取り換えていただくのです。目を、イエスさまの十字架の憐れみによって、新しくされ続けられて、愛の視力を、回復されられ続けていくのです。

イエスさまはこうおっしゃいます。

「あなたに、愛の視力を、わたしが命をかけて、与えるよ！」と。

今わたくしたちはレントを歩んでいます。

先ほどから、「神さまの裁き」と申しておりますが、実は神様の裁きは、その独り子イエスさまに、下ったのです。

神さまは私たちの目の中の、罪の丸太を、ご自身の独り子に背負わせました。丸太も、十字架の木も、実際、非常に重いそうです。

わたくしたち一人ひとり、全ての者の目の丸太は、神さまの独り子しか背負うことができないほどに、大きく、重い、罪なのです。

しかし、罪びとを愛することをおやめにならない神さまは、イエスさまにわたしたちの丸太を背負わせ、イエスさまを私たちの代わりに裁かれたのです。

そうすることで、私たちの罪を赦しておしまいになりました。

イエスさまの十字架の死によって、わたしたちの目の丸太は取り除かれ、神様をまっすぐに見つめる目が開かれたのです。

イエスさまはおっしゃいます。「あなたの目の丸太は、私があなたに代わって裁きを受けることで、取り除かれるよ、そのことを見つめてほしいよ！」

これが、「まず自分の目から丸太を取り除け」というみ言葉の意味です。イエスさまの十字架の赦しが、このわたしの罪の丸太を、取り除くためだったことを、知ること。

そしてその時に、「はっきり見えるようになって、兄弟の目からおが屑を取り除くことができる」のです。

それは、「丸太を取り除かれて、はっきり見えるようになったら、人の目の中のどんな小さなおが屑をも見落とさずに人を裁くことができる！」ということではありません。

はっきり見えるようになった私たちの目に見えてくるのは、「自分の目にあった丸太の大きさ」です。

神様の独り子イエスさまが、十字架にかかって死んで下さらなければ、取り除くことができない程の大きな丸太が、自分の目を塞いでいた。同時に、その丸太を取り除き、罪を赦して下さった神さまの大きな憐れみが、見えてくるのです。

この憐れみの中に、生かされていることを、この朝、心にとめたいと思うのです。

そうすると、隣人を見つめる目も変ってゆきます。

「裁くな」というのは、お互いに口出しするのはやめよう、無関心でいよう、ということではありません。

「人を裁く目」から、「おが屑を取り除く目」へと、変えられていきなさいということです。

丸太を取り除かれた目で、隣人を見ていくのです。

私の目の丸太を取り除いて下さった神さまの恵みが、この人にも注がれている。そうして、誰かを赦していくのです。

4 節の「あなたの目からおが屑を取らせてください」というのは、

「取らせていただけないでしょうか」という丁寧な言葉になります。ふんぞりかえって、おが屑を取ってやろう、というのではありません。隣人の目にあるおが屑を、本当に正しく見て、取るため

の視力、愛の視力をもって、隣人を見つめてゆくのです。

すべての人の、愛の視力が回復するためにこそ、イエスさまは十字架についてくださいました。

「救い」という言葉は、もともと「交換する」という言葉です。イエスさまの愛の目が、わたしたちの目に交換されるのです。

わたしたちの目は、誰かを裁いて殺す目ではなく、他の人を執り成し、生かす目に、変えられるのです。ただ主の恵みによって。

主の十字架によって私は赦された。今度は私も赦そう。

「人を裁くな」という主の言葉は、こうして実現していくのです。

先ほども申しましたが、私たちはそれぞれの置かれた立場や場面に応じて、ある意味で人を裁いたり、判断したりして生活します。それはむしろ責任ある生き方に不可欠です。

しかしそこにおいて、イエスさまの赦しを思い出していくこと、赦しの恵みに、誰かと共にあずかって生きることを、求めていきたいのです。

この後、讃美歌二編 185 番を賛美します。

「カルバリ山の 十字架につきて

イエスはとうとき 血しおを流し

すくいのみちを ひらきたまえり

主イエスの十字架 わがためなり

十字架 十字架

主イエスの十字架 わがためなり。」

「カルバリ山の 十字架に」ついてくださったイエスさまが、十字架の上でお祈りになった祈り。「父よ、彼らをお赦してください。自分

が何をしているのか知らないのです（ルカ 22：34）」

この主の祈りは、「わがためなり」と知って、心から感謝して歌いましょう。

「自分が何をしているのか知らなかった。」けれども、「主によって、目から丸太を取り除かれた」、赦された者としての生き方を、初めて参りましょう。

この目を十字架に上げ、自分にくだされるはずだった裁きを、まず見つめましょう。

「主イエスの十字架、わがためなり」と、心から歌えるならば、十字架の赦しの慰めは、もっともっと深く、わたしたちの心に宿るのです。

今日の7：6には、いわゆる「豚に真珠」という諺の由来になっているみ言葉がありました。

神聖なものを犬に与えてはならず、また、真珠を豚に投げてはならない。それを足で踏みにじり、向き直ってあなたがたにかみついてくるだろう。

私たちは神聖なもの、あるいは真珠を持っているというのです。

それは、私たちの目から丸太を取り除いて下さった、神様の恵みのことです。神聖な、高価な真珠のような恵みを、私たちはいただいています。その恵みを、大切な人たちと共に、分かち合っていきたいと、わたしたちは願っています。

ところがそう願っても、相手はそれを好まず、それを足で踏みにじり、向き直ってかみついてくるということが起こるだろう、と主はおっしゃっておられます。

それはまさに、神様の恵みを見る目が、塞がれてしまっているからなのです。

そういうことがあっても、驚いたり、あわてなくていいですよ、とおっしゃっておられるのだと思います。

イエスさまご自身、そのようにして、人々に踏みにじられ、かみつかれて、十字架にかけられてゆかれました。

そして、そういうことは繰り返されます。

大事なことは、そこで私たちが、与えられている神聖な真珠を、本当に大切にすることです。

なかなか人々に受け入れてもらえないからといって、神さまの恵みを安売りしたりせず、また疑ったりせず、大切にしていきましょう。わたしたちは、先に真珠の尊さを知らされました。

そのわたしたちが、主の恵みの価値を軽んじれば、私たちこそが、犬や豚同然になってしまいます。

先に、目の丸太を取り除いていただいた者として、大切に参りましょう。

そして、多くの人々が、真珠の恵みを発見できるよう、わたしたちなりの精いっぱいのことを、尽くして参りましょう。